

## 冬から数える四季がある

榎本 恵

奨励者紹介〔えのもと・めぐみ〕

宗教法人アシュラムセンター主幹牧師

日本キリスト教団牧師

イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」と、前もって合図を決めていた。ユダはすぐイエスに近寄り、「先生、こんばんは」と言って接吻した。イエスは、「友よ、しようとしていることをするがよい」と言われた。すると人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえた。そのとき、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。」またそのとき、群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内に座って教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書いたことが実現するためである。」このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

(マタイによる福音書 26 章 47—56 節)

### 大人になった私たちには、「恋人はサンタクロース」は自明のこと

みなさん、おはようございます。イエス・キリストのご降誕を祝うクリスマスを目前にし、こうして同志社大学水曜チャペル・アワーで、お話しできることを感謝いたします。ところで、今日私が選びました聖書の箇所を読んで、「この牧師、選ぶ聖書箇所を間違っているのではないかと訝<sup>いぶか</sup>しむ方もおられることでしょう。確かに、このクリスマスの時期に読むには、ユダの裏切りの物語は相応しくないのかもしれませんが。しかし、私はあえてこの聖書箇所を選ばせていただきました。ご存じのように、この 12 月 25 日が、イエス・キリストの誕生日であるなどということは、聖書のどこにも書かれていません。幼児が、この冬の最中に、しかも家畜小屋で生まれたら、凍死してしまうのではないかなどと考えることは、大人になった私たちにとって「恋人がサンタクロース」以上に自明のことなのではないでしょうか。

ウィキペディアによりますと、クリスマスが 12 月 25 日と定められたのは、西暦 325 年の第 1 回ニカイア公会議での議論を経たのちであり、遅くとも、354 年には、西方教会で始まり、4 世紀末には東方教会でも広まっていたそうです。東方教会と西方教会では、使う暦が今も違っており、東方教会の使うユリウス暦での 12 月 25 日は、私たちの用いているグレゴリオ暦では 1 月 7 日になるそうです。この日は、ローマの暦では冬至にあたり、どうも当時のローマの宗教の一つ、ミトラ教の太陽神を祝う日に影響を受け

たのではないとも言われています。いずれにせよ、この12月25日の日が選ばれたのは、歴史的事実というよりは、冬至という一番陽の光の短い日に、その暗闇の中から新しく生まれる光をキリスト教信仰に重ね合わせたという意味合いが強いのではないのでしょうか。ですから、この時期、町中をイルミネーションで飾り付け、チキンやケーキを食べて、イエス・キリストの誕生日として祝うのは、少々違うのではないかとおられてもしょうがありません。

けれども、私たち教会にとっては、新しい年はいつも、このアドベントから数えられ、始まるのです。ちょうど先月の27日が待降節第一の主日であり、このアドベント・クランツに一本目の蠟燭が灯り、教会の新しい年が始まる。それは、1月1日の元旦でもなければ、4月の学校の入学の時期でもない。この蠟燭が灯る時こそ、私たち教会の一年の始まりなのです。

### winter, spring, summer, fall キャロル・キング『君の友だち』

ところで、私は今回の説教題を、「冬から数える四季がある」とつけました。美しい芽吹き季節の春、暑さの中にも葉は生い茂り、逞しい成長を見せる夏、豊かな恵みの実りの秋。そしてその後続くのは寒空の下に、冬枯れしたなんとも淋しい冬の季節。私たちは、4つの季節の移り変わりを、こんなふうに数えることが普通ではないでしょうか。しかし、そんな鬱々とした命の存在さえも感じさせないような冬から数える季節があるのです。ちょうど教会が、このアドベントの時から数えて、一年が始まるように。

もう随分と昔になりますが、1971年大ヒットした、アメリカのキャロル・キングのアルバム『タペストリー（邦題『つづれおり』）』の中の一曲に、『You've got a friend（君の友だち）』という名曲があります。キャロルの盟友ジェームス・テイラーによってカバーされ、その年のビルボードのチャート1位も獲得した名曲です。皆さん方も、きっとお聞きになれば「ああ、この曲か」と気づかれることでしょう。実はこの『You've got a friend（君の友だち）』の中で、キャロル・キングは興味深いことに「winter, spring, summer, fall」と何度も「冬、春、夏、秋」とこの4つの季節を繰り返し歌うのです。

それはこんな歌詞です。

「When you 're down and troubled and you need some lovin' care

And nothin' nothin' is goin' right

Close your eyes and think of me And soon I will be there

To brighten up ever your darkest night

君が、落ち込んで、困っている時、少しの愛ある助けを必要としている時、それでも何もかもがうまくいかない時 目を閉じて僕のことを思ってみて 僕はすぐにそこにいるよ。君の一番暗い夜を明るくするために」（私訳）。

「Winter, spring, summer, or fall

All you have to do is call and i' ll be there

You' ve got a friend

冬でも、春でも、夏でも、秋でも 君が呼びさえすれば、僕はそこにいるよ。

君にはそんな友達がいるんだ」（私訳）。

(作詞作曲 Carol King 1972年『タペストリー』の「You've got a friend」からの引用)

どうでしょう。冬から数える季節があるのです。私たちの人生の季節の移り変わりは、いつも順調なものばかりではありません。辛さや、悲しみ、そしてどうしようもない寂しさ、実は、私たちの人生の四季は、考えてみれば、冬から始まることの方が多いのではないのでしょうか。そんな時に、「君の一番暗い夜を明るく」してくれる「君の友達」がいるのです。

しかし、私たちの目の前に見える現実、それは全く違います。選挙との引き換えに、カルト教団を応援し、そのことが問題視された途端、潮が引くように離れ去り「知らぬ存ぜぬ」を決め込む政治家の姿があります。「シャーデンフロイデ」という言葉があります。ドイツ語の「損害」「不幸」を意味するシャーデンと喜びを意味するフロイデが合わさって、他人の不幸をよろこぶ気持ち、「人の不幸は蜜の味」そんな誰かの失敗や不幸をほくそ笑んでいる人がいます。そしてそれは、一人の政治家や特異な感情の持ち主だということにとどまることなく、「自己責任」や「ウインウインの関係」などという言葉が語られる今の時代の象徴ではないかと思うのです。私たちには、もう「そんな友達」はいないのでしょうか。冬枯れた季節に呼びさえすれば、そばにいてくれる「君の友達」などは、絵空事に過ぎないのでしょうか。

私は、そうではないと信じています。私たちには、この冬から始まる季節をも、共にいるよと言ってくれる本当の友がいるのです。

#### ヘタイロス、同志、同僚、仲間

さて、今日選びました聖書の箇所は、先ほども申しましたように、イエスを裏切ろうとしたユダが、祭司長たちや群衆を手引きし、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」(マタイによる福音書 26章 48節)と告げ、イエスのそばに近寄ってくるという、主の十字架への道のまさに端緒となる出来事でした。この印象的なシーンは、4つの福音書全てに共通して描かれています。そしてこのマタイによる福音書だけが、裏切りの合図、接吻の挨拶をしようとするユダに対して、「友よ、しようとしていることをするがよい」(同 26章 50節)と言うイエスの言葉を記すのです。ここで「友」と訳されたギリシャ語「ヘタイロス」は、聖書の中でも、3度しか使われていない大変珍しい言葉です。兄弟愛をあらわす「フィリア」ではなく、「ヘタイロス」は、同志、同僚、仲間と訳される「友」なのです。聖書では、ブドウ園の主人が労働者達に賃金を払う時、1日働いたものにも、1時間しか働かなかったものにも同じ1デナリオンを払った時、それは不公平だと文句を言う労働者に対し、「友よ、あなたに不当なことはしていない」(同 20章 13節)と言い放った主人の言葉として、記されています。

同志よ、同じ思いを持っている仲間よ、イエスは、そんな思いを込めて、ユダに告げるのです。「友よ、しようとしていることをするがよい」と。なんと意味の深い言葉ではありませんか。人の子にはまくらするところもないというほどの、過酷な旅を共にし、あらゆる誹謗中傷を受けながら、罪人や徴税人達と同じ釜の飯を食べ、自分を捨て、自分の十字架を背負って共に従ってきた同志、しかし今や、それらは皆、裏切る者となり、見捨てて逃げてしまう者となった。けれども、イエスは彼らをその最後まで、「友よ」「同志よ」と呼ぶのです。そして、そのしようすることをしなさいと、静かに告げるのです。

「どのようなときにも、友を愛すれば苦難の時の兄弟が生まれる」(箴言 17章 17節)。旧約聖書の知恵はこう語ります。しかし、実際は、この苦難の時に、友を助けるよりは、裏切り、離れ去っていくことの方

が多いのではないのでしょうか。私には苦い経験があります。大学生の頃、車で大きな事故をしたことがありました。雨の日スリップし、車が横転してしまったのです。幸い、私も同乗していた友も、大きな怪我はなかったのですが、上下逆さまになった状態で、私は彼を置いたまま、我先に運転席から逃げ出してしまったのです。以来彼との友情は壊れたままになってしまいました。確かに、私たち人間は、自分のことを優先してしまう者です。考えてみれば、友情や愛情も利害や損得で結びついてしまっていることの方が多いでしょう。そういう意味において、私たちは、あの政治家達やカルト宗教の幹部連中のことを、笑える者ではありません。私たちも同じ穴のムジナなのです。しかし、私たちが信じる方は、そうではない。どんなに裏切られ、離れ去られても、決して見捨てず、怒りもせず、かえってそんな私たちを「友」と呼び、全てを赦し、招いてくださる方がいるのです。「君が、落ち込んで、困っている時、少しの愛ある助けを必要としている時、それでも何もかもがうまくいかない時 目を閉じて僕のことを思ってみて 僕はすぐにそこにいるよ。君の一番暗い夜を明るくするために」。そう、そんな友がいるのです。そして、そんな友となるように、イエスは「私がそうしたように、あなた方も互いに愛し合いなさい」と自らの身を持って、私たちに教えるのです。あの日、裏切り、逃げ去った弟子達は、イエスの十字架の死と復活の後、きっと、この「友よ」という主の呼びかけを思い起こしたに違いありません。そして彼らもまた、苦難の時の兄弟として、冬から始まる人生の友となっていたのです。

### 慈しみ深き友なるイエスは

さて、今日最後に、もう一曲歌を紹介しましょう。それはこの後、コール・フリューゲルの皆さんに歌っていただきます『讚美歌 21』493番です。「いつくしみ深い、友なるイエスは」と始まるこの讚美歌は、おそらく日本人がイメージする最も有名な讚美歌ではないかと思うんです。これは、結婚式でも歌われ、ご葬儀でも歌われる。また、教会をイメージするテレビの映像では、必ずと言っていいほど流される定番の讚美歌なのではないのでしょうか。「いつくしみ深い友イエス」まさに今日の話にピッタリの賛美が選ばれています。ところで、この歌の原題は『What a friend we have in Jesus』、「何という友だろう、イエスは」とでも訳しましょうか、本当に驚くべき友であるイエスを歌ったものです。この歌を作詞したのは、ジョセフ・スクライビンという詩人です。彼は1819年アイルランドに生まれ、のちにカナダで教師、宗教者、また詩人として活動し、1887年67歳で天に召されました。しかし、その彼の人生は、非常に波乱に富んだ、悲しみと涙の人生でした。彼は、最初の婚約者を、その結婚式の前日に失います。それは溺死だったと言います。また41歳の時に2度目の婚約者を結核で失い、以降生涯独身を貫き、彼自身もまた、散歩中に溝に落ちて亡くなるという悲惨なものでした。しかも、この詩が世に出たのは、彼の死後10年近くのこのことであり、長らくその作詞者は別の人物とされていたそうです。まさに、冬から始まるその人生の四季の中で、彼は、この「慈しみ深い友」「何という友」と出会っていたのではなかったのでしょうか。

「賛美歌『いつくしみ深き』の作詞年」という論文の中で、西南学院大学の城俊幸氏は、それについてこんなことを書いています。「『詞の意味内容』と『彼の人生』とを照らしあわせて考えれば、この詞は一時期に書かれたものではなく、(中略)『一番は1843年以前、二番は1844—60年の間、三番は1860年以降に作詞された』と推測できる。一番の歌詞は若い時の力にあふれているので、1843年以前に書かれた。しかし、二番の歌詞は一度目の婚約者の死(1843)後、それを乗り越えられた時に書かれた

(1844—1860)ものと思われる。そして、三番の歌詞は二度目の婚約者が亡くなった(1860)後に、書かれた(1864)と考えられる。しかも、アイルランドの母が病気だという知らせを受け、母を慰めるために、手紙にこの詞を添えて送った(1864)という証言もある。そこで、その時がこの詞の完成とみなすことができる。自分の人生の歩みと共に生まれた詞が、母へ手紙を書き送った1864年に完結した、ということになる」。

私たちは、この後静かに、コール・フリーゲルによって歌われるこの歌を聴きながら黙想する時を持ちます。どうか一人一人が、悲しみや苦しみ、愛する人や大切な人との別れ、裏切りや絶望、そんなどうにもならない人生の冬の時に、しかし、「友よ」と呼びかけてくださる、驚くべき方のおられることに、心を留めていただけたらと思います。確かに、この12月にイエス・キリストが誕生したことは、歴史的事実でもなく、また聖書学的にも真実ではないでしょう。しかし、この冬から数える季節の中で、私たちの友が、お生まれになったことは厳然とした事実であり、また真実なのです。その友の誕生日を覚え、私たちは今日、祈りましょう。

#### [参考]

・『ウィキペディア フリー百科事典「クリスマス」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%9E%E3%82%B9> (2022年12月14日アクセス)

・城俊幸「賛美歌『いつくしみ深き』の作詞年」『西南学院大学院神学・人間科学研究論集』5 2015年

2022年12月14日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録